

研究テーマ

土佐清水市立清水小学校

「主体的・協働的に学ぶ児童の育成」**～対話とふり返りを重視した算数科の授業づくりを通して～**

学級数：15

児童数：293

研究の概要・成果**1. 研究の概要**

本校は昨年度まで6年間に及び教育課程拠点校として、算数科の授業研究に取り組んできた。今年度はまた新たに同指定の1年目を迎えたことになる。これまでの成果として全国学力・学習状況調査で無解答が減るなど、子どもたちの学びに向かう姿勢や国語や算数の基礎的・基本的な学力の定着も徐々に図られてきた。しかし、今年度の全国学力・学習状況調査では、国語A以外は全国平均を下回り、既習事項を組み合わせる筋道を立てて考え、説明する問題においてはもとより、基礎・基本の徹底にも弱さが見られた。本校にとって知識・理解の定着を図ると共に、筋道を立てて考え、表現する力をさらに伸ばしていくことが必要といえる。そのためにも、児童が主体的に考え、話し合い、考えを深化・統合し、まとめ、振り返る授業づくりを進めていくことが望まれる。よって本年度は対話とふり返りを重視することで、児童が主体的かつ協働的に学習に取り組めるようにし、「筋道を立てて考え、表現する力」の育成を目指した。

(1) 算数科授業研究（児童の実態に即した授業改善）

全教員が1回以上公開・提案・研究授業を行い、各学級の児童の実態に即した授業となるよう、対話とふり返りの時間確保と質の向上、問題提示や板書の工夫、さらには教具の開発と活用等に努めてきた。また、教科の専門性を高めるため、笠井健一先生（文部科学省教科調査官）、西部教育事務所指導主事を講師として招聘し、授業の課題について助言を頂きながら教材研究や授業改善に取り組んできた。

(2) 単元構想（単元の全時間の指導案を含む）の作成と、言語活動を記載した年間指導計画の加筆修正

今年度も新たに各学年で1単元分の単元構想（全時間の指導案を含む）を作成した。また過去6年間に作成してきた、毎時間ごとの言語活動を記載した年間指導計画を活用しながら、その加筆修正を行ってきた。

(3) 授業スタンダードの確認と徹底

年度当初に研究主任が授業スタンダードに基づいた提案授業を行い、全教員に「清水小授業スタンダード」の徹底を促し、下記についての確認も併せて行った。

- ① 「聴く・話す・書く」の系統的な目標を設定し（図1）、これに基づき「聴き方・話し方・書き方の手引き」を作成。「聴く」「話す」「書く」のそれぞれの学年目標とモジュールステップを明示して、対話やグループ・全体協議をはじめとする言語活動の指針とする。
- ② 「清水小学び合いカード（低・中・高学年用）」を活用して、対話やグループ協議を充実させる。
- ③ 「算数日記スタンダード」を作成し、各学年で目標とする「質や量」と教師からの

「評価の視点」等を明らかにすることで、児童と教師が効果的かつ効率的にふり返り活動に取り組む。

- ④ 算数科のノート指導について全学年で共通して行うことを4月に確認し、授業の流れや児童の思考や気づき等が見えるノートづくりを進める。校内研で、後述の標準学力調査で算数の評定1であった児童のノートを持ち寄り、成果や課題、今後の手立て等について協議する。

図1（「聴く・話す・書く」の学年別到達目標）



(4) 学力調査の活用

校内研修において、全教員で全国学力・学習状況調査、単元テスト、高知県学力定着状況調査の分析結果を共有し、洗い出した課題の改善策について協議した。また、それぞれのテストで誤答が多かった問題を解き、今求められている学力観について共通理解を図った。10月には、全国学力・学習状況調査と標準学力調査で特に誤答が多かった問題（平均正答率60%未満）について、2～6年が再テストを行い、それまでの取組の検証を行った。

(5) 思考力・判断力・表現力＝活用力の育成

学力調査の分析から、本校の課題である思考力・判断力・表現力を要する問題のどこにつまずいているか考察し、各学年で「日々の授業」、「家庭学習」、「その他の場面」における具体的な手立てや施策を明らかにした。また、学期末と10月に進捗状況と成果・課題について、学年団や教職員全体で協議し、一覧表にまとめて共有してきた。

(6) 算数に関わる環境づくり

① 量感を養う工夫

これまでの各学力調査結果等から見出された課題の一つである「長さ・広さ・重さ等の量感」を養うため、遠足などの行事を利用して「重さ当て」「長さ当て」等量感を養うゲームを取り入れてきた。



② ペーパーチャレランへの参加

「ペーパーチャレラン（ゲームや迷路等の要素を含んだ計算等の問題）」に取り組めるように、算数コーナーに毎月問題と全国ランキング結果を提示した。学期が進むにつれてランキング上位や高得点を目指し、楽しみながら取り組む児童が増えた。なかには、家庭に持ち帰り親子でチャレンジする児童や、新しい問題をせがんでくる児童も見られた。

③ モデルノート（算数科）の提示

モデルとなる算数科のノート【自分の考え（方法・理由の説明）、友達の考え、まとめ、振り返り（適用問題）等を含む】を掲示し、ノートづくりに役立てるようにし

た。モデルノートは毎月更新し、同じ児童のノートが提示されないように配慮した。

(7) 家庭学習の習慣化と質の向上

学力の定着と向上のためには家庭学習が欠かせないが、本校は家庭環境が原因で家庭での学習が難しい児童や家庭学習がそろいにくい児童がいるため、以下の取組を進めた。

- ① 毎月最後の校内研で「家庭学習提出状況調べ」を行い、各学級の実態を共有する。確かな学力部会が「家庭学習の手引き」「自主学習の手引き」を配布し、これらに基づいた家庭学習ができるようにする。
- ② 宿題の内容を見直し、予習：復習の比重が3：7になることを目指す。
- ③ 家庭学習ができていない児童は放課後学習教室への参加を促進させる。また、放課後学習教室の体制化を図る。
- ④ 5月と11月に各学級の家庭学習の内容と量を確認する。また、夏休みの宿題の量や質、提出状況を調べる。

(8) 研究内容の普及

土佐清水市教育研究集会の算数部会で、本校研究主任が授業スタンダードをもとに提案授業を行い、学校の取組や成果についての情報発信も併せて行った。また、中間発表会で市内外70名の教員、関係者の参加のもと提案授業・協議・講演（『効果的な対話やふり返りを取り入れた授業づくり～先進校の事例をもとにして～』講師：笠井健一調査官）等を実施し、取組成果の普及に努めた。3月には黒潮町内の小学校に赴き、校内研修の場で本校の取組について紹介したり、授業改善や校内研の進め方等について助言をしたりする予定である。また、HPにて、今年度の取組を学期に1回程度更新し、情報発信を行った。

(9) 視察研修

- ①安芸市立安芸第一小学校 平成28年5月12日（木）3名参加

研究テーマ「演繹的な思考と表現を育成する授業」

～子どもは授業の中でいかに思考・表現するか～

講師である齋藤一弥先生（横浜市立六浦南小学校長）の提案授業・5年「内角の和」を参観した後、同講師より授業の中における子どもたちの思考・表現についての講演を聴いた。提案授業では子どもたちが話したくて始める対話や目的がはっきりとした必然性のある対話に進んで取り組む子どもたちの姿が見られた。講演では、これからの授業づくりのポイントや児童の思考の流れについて学ぶことができた。

- ②香川大学附属坂出小学校 平成29年1月26日（木）、27日（金）4名参加

研究テーマ「学びに熱中する子どもの育成」

～学習意欲を育て、他者と協働しながら考え続ける力を育む授業づくり～

『熱中する子ども』即ち何かに興味を持ち、主体的に、他者と協働しながら活動できる児童の育成を目指した授業研究を行っていた。清水小における校内研修の方向の妥当性を実感しながら、来年度、3年間の研究の2年目を迎え、今年度の取組のさらなる工夫・改善・発展が求められる本校の校内研修にとって、大変参考になる研究内容であった。

2. 研究の成果

(1) 学力調査における検証

- ①6年生児童の検証

下記のグラフは、全国学力・学習状況調査及び高知県学力定着状況調査（算数科）の結果である。

図 1 (平成 28 年度の全国学力・学習状況調査)

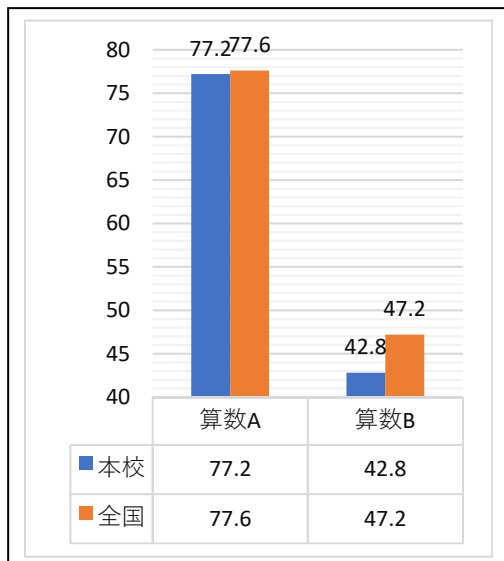
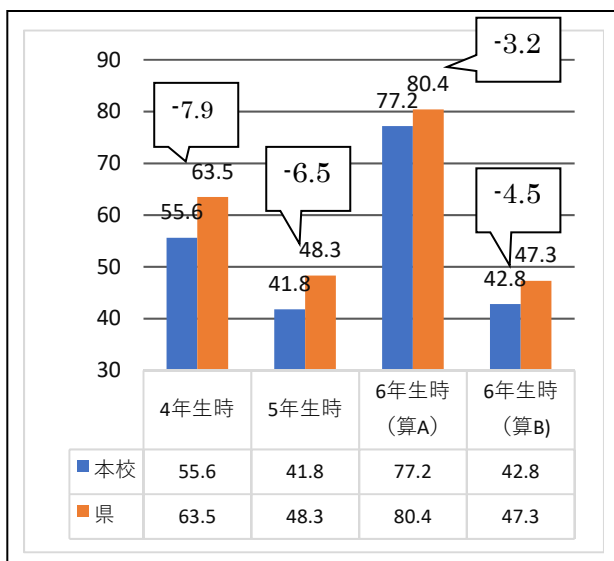


図 2 (現 6 年生の 4 年生時からの県平均との比較 I)
 ※ 4・5 年生時は高知県学力定着状況調査との比較
 6 年(算数 A・B)は全国学力・学習状況調査結果との比較



本年度の 6 年生は、下学年の時から学力調査において、全国平均や県平均を下回る結果が続いており、本年度も算数 A・B で全国平均に届かなかった(図 1)。しかしながら、過去の県版調査や全国調査の県平均との差を経年で見ると、着実にその差は縮まっている(図 2)。さらに、10 月に行った特に誤答が多かった問題で作成した再テストでは、ほとんどの問題で 4 月からの改善が見られた。特に、算数 B の記述式問題では、10 月の段階で全国平均を大きく上回ることができた。徐々にではあるが、基礎学力の定着とともに、活用力も身に付いてきている。

また、全国調査の質問紙による算数科の関心・意欲に関わる質問では、昨年度同様に肯定的評価が全国平均を上回っていた。

Q 1 「算数の授業で新しい問題に出合ったとき、それを解いてみたいと思いますか」
 肯定的評価 82.6% (全国 75.8%) → +6.8

Q 2 「算数の授業の解き方が分からないときは、諦めずにいろいろな方法を考えますか」
 肯定的評価 87.0% (全国 81.0%) → +6.0

他に「算数の勉強が大切だと考えている」児童や「算数の勉強は好きだ」と感じている児童も全国に比べて多かった。これまで取り組んできた授業改善が、児童の関心・意欲を高め、徐々にではあるが学力向上に結び付いてきている。一方で「算数での学びを生活に活用しようとしている」児童や「問題を解く時、もっと簡単な解き方を考えている」児童は、全国平均を下回っていた。算数の授業で学び得たことを生活や学習に活用していく力の育成にはまだまだ課題があると考えられる。

② 4・5 年生児童の検証

高知県学力定着状況調査の 5 年生算数の結果は 73.9% (県平均 54.5%)、4 年生の結果は 65.6% (県平均 60.9%) で、両学年とも県平均 +3P 以上という目標を達成することができた(図 3)。

特に、対話とふり返りを重視した授業改善や、自分だけでなく、友だちの説明もノートに書き足したり、自分の言葉で伝えたりする活動を積

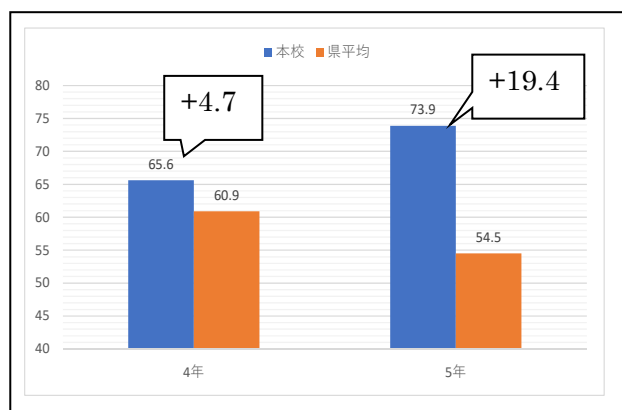


図 3 (平成 28 年度高知県学力定着状況調査における県平均との比較)

極的に取り入れたことで、「記述式問題における説明不足」の改善が進み、記述式問題の正答率が、ほとんど県平均を上回った（表１）。

表１ 平成２８年度高知県学力状況調査の記述式問題における正答率と無解答率の結果

【５年】			【４年】		
設問番号	本校正答率 ()は無解答	県正答率 ()は無解答	設問番号	本校正答率 ()は無解答	県正答率 ()は無解答
４（１）	83.3 (7.1)	22.6 (10.9)	６（２）	5.2 (17.2)	6.6 (24.0)
７	85.7 (0.0)	30.5 (2.4)	１２（２）	34.5 (19.0)	9.2 (22.8)
１１（２）	9.5 (16.7)	8.0 (20.3)			

【考察】

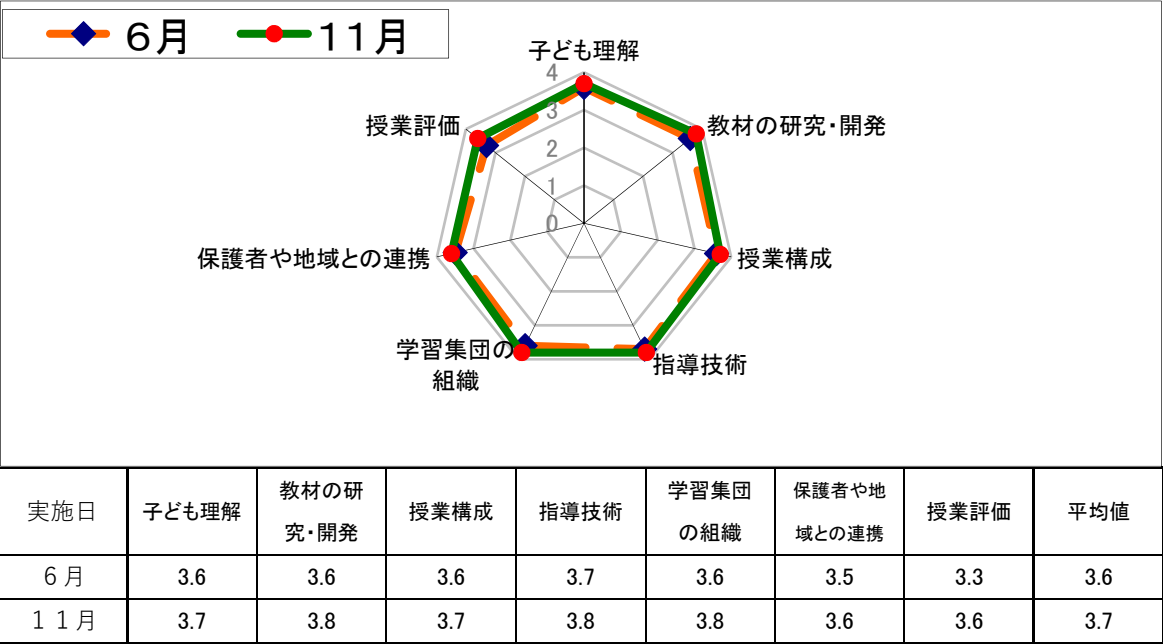
- ・ ５年生では、昨年度までの本校の課題領域でもあった「図形」領域の記述式問題で特に伸びが見られた。自分だけでなく、友だちの説明もノートに書き足したり、自分の言葉で伝えたりする活動に日々取り組んできたことが成果となって現れている。
- ・ 全体的には、記述問題の正答率は向上してきているが、複数の情報や既習の知識・技能を基に、複数の手順を要して答えるような問題の正答率は依然として低い。学習過程の中で、比較・分類・整理したり、統合・確認したりする活動を継続して取り入れていく必要がある。
- ・ 記述式問題での無解答率は全て県平均より低くなっており、最後まで粘り強く、積極的に取り組む姿が見られるようになってきたと言える。

年度当初より、高知県学力状況調査を学力の定着と向上に向けての取組の大きな検証の場としてとらえていたが、結果からもこれまでの取組の大きな成果と言えるだろう。今年度の研究の妥当性を再確認することができた。

(2) 授業力診断シートにおける検証

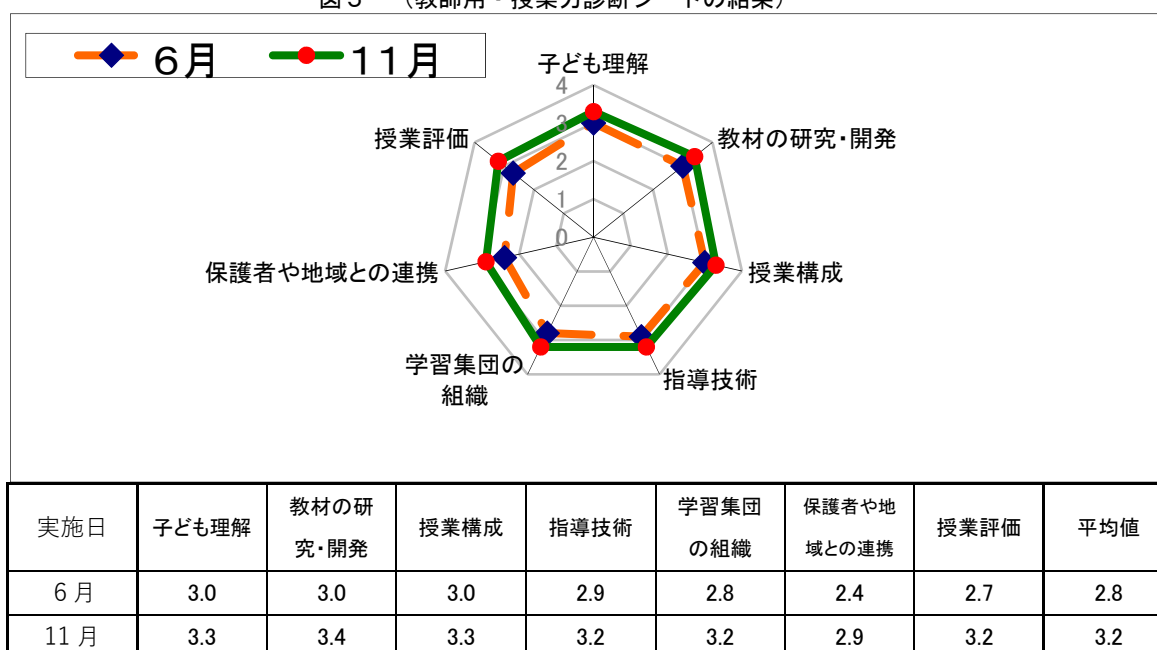
①児童における検証

図４ （児童用・授業力診断シートの結果）



②教師における検証

図5 (教師用・授業力診断シートの結果)



授業力診断シートを活用し、授業の客観的な分析を行った。6月と比較すると11月は多くの項目で向上が見られた(図4、図5)。また、児童用・授業力診断シートでは目標(3.5P)以上を6月、11月ともに達成することができた。一方で教師用授業力診断シートでは、2回目は1回目より0.4Pの伸びこそあったものの、目標(3.3P以上)を達成することができなかった。昨年度の結果(6月3.1P、11月3.2P)と比較しても、大きな変化は認められず、それぞれの教員が課題を明確にして授業力の向上に努める必要があった。特に、児童評価と教師評価で隔たりが大きく、正確な実態把握や授業評価が必要である。教師ができたと思ったことは児童もできたと感じ、逆に教師ができていないと思ったことは児童もできていないと感じることが、児童の視点に立った授業評価・授業改善につながると考える。さらに、伸び率は大きいものの「保護者や地域との連携」の項目は3.0Pに届いていなかった。授業と家庭学習のリンク化や生活との関わりをより一層深めていく手立てが今後の課題である。

(3) 授業評価アンケートにおける検証(中間発表における授業参観者からの評価)

Q1「対話とふり返りを重視した授業づくりができていましたか」: 肯定的評価(57.1%)

Q2「言語活動を取り入れた授業が行われていましたか」: 肯定的評価(50.0%)

決して十分な数値とは言えないが、記述欄からは、授業の工夫・改善に関わる肯定的な評価や今後の課題についての意見をいただき、今年度の取組を客観的に検証し、課題を見出していく上で重要な資料となった。

(4) 学校評価アンケートにおける検証

① 児童アンケート

- ・「学校生活が楽しいですか」 肯定的評価(93%)
- ・「自分の学級が楽しいですか」 肯定的評価(94%)
- ・「授業(全教科)がよく分かりますか」 肯定的評価(90%)
- ・「授業(算数科)が楽しいですか」 肯定的評価(89%)

② 保護者アンケート

- ・「お子さんは学校生活に満足していますか」 肯定的評価(94%)
 - ・「先生は分かりやすい授業(算数科)に努めていると思いますか」 肯定的評価(93%)
- 児童・保護者共に、算数科を含む授業づくり等の全般に関して、高い評価が得られた

と言える。しかし、いずれの項目も昨年度よりわずかに下がっており、児童評価では目標値である90%以上にはわずかに届かなかった項目もある。

(5) 対話とふり返りを重視した授業づくりについてのアンケートにおける検証

今年度は授業スタンダードの確立の一年と位置づけ、学期末ごとに教員に授業改善や授業スタンダード・算数的環境づくり等に関するアンケートを実施し、それぞれの取組の検証を行い、今後の手立てや施策について協議してきた。

表2 (授業改善についてのアンケート結果抜粋)

項 目	学期	はい	どちらかとい えは、はい	どちらかとい えは、いいえ	いいえ	合計
対話の場を毎時間確保できた。	①	4	10	0	3	17
	②	6	7	1	3	17
	③	6	8	0	3	17
適用問題や算数日記による振り返りを毎時間確保できた。	①	3	11	1	2	17
	②	5	8	2	1	16
	③	3	11	1	2	17
スタンダードに沿った授業を実施している。 めあて→問題→見通し→自力解決→対話→全体→ まとめ→振り返り	①	5	10	1	1	17
	②	10	3	2	2	17
	③	4	10	2	1	17

(6) 算数ノート実践交流における検証

ノート指導の徹底と充実を図るため、標準学力調査で評定1であった児童のノートを持ち寄り、ノート指導の実践交流を行った。標準学力調査を受けていない1年生は気になる児童のノート、6年生はモデルとなるノートを提示し、6年間で目指すべきゴール像を明らかにすることをねらった。どの学年でも全体で確認した算数科ノート指導のマニュアル通りの指導が徹底されており、字や図などの雑さは若干あるものの、授業の流れが分かるノートづくりが行われていた。

(7) 家庭学習提出状況調べにおける検証

毎月末に各学級の家庭学習の提出状況を集計し、校内研修の場で結果を共有してきたことから、以下の成果が挙げられる。

- ・10月以降、「毎日全部提出」の割合が80%を超えている。
- ・1年生は一年間を通して「毎日全部提出」100%を維持できた。

一方で、毎日一部或いは全部忘れる児童は特定化されており、個に応じた支援や手立てを検討する必要がある。来年度は90%以上の達成率と家庭学習の質と内容の改善を重点目標としたい。

(8) 活用力の育成の検証

毎学期末と10月に、活用力育成の進捗状況及び成果と課題について全学年の一覧表を作成し、今後の手立てや施策について協議してきた。

成果

- ・体験学習を計画的に行うことで、習ったことと生活が結びつき、理解がより深いものとなった。
- ・手引きに沿った説明の仕方（言い方）や、モデルとなるノートの書き方（算数日記）を示したことで、よい言い方や書き方を取り入れる児童が増え、表現力が高まってきている。

- ・聴く際には相違点を明確にすることを意識させ、簡単に「分かりました。」を言わせない指導の徹底を継続することで思考力・表現力が高まってきている。

課題

- ・経験してきたパターンにあてはまらない活用問題や説明記述等になると、途端にできなくなる子どもも少なくない。
- ・1年を終えてみて、やはり思考力、判断力、表現力を高めるために要となるのは授業であり、日々の積み重ねが重要である。今年度の取組を更に充実させ、教員一人ひとりの授業力の向上が必要である。

3. 課題とその改善策

今年度の高知県学力定着状況調査の結果から、4・5年生の学力について目標以上の成果が見られた一方で、依然説明を要する記述問題や複数の手順を要する問題に対する課題があることが明らかになった。また、それぞれのアンケート調査や実態調査でも今年度の取り組みの課題や改善点が洗い出された。教員が明確な課題意識を持ち、組織で具体的な取組を進め、出来具合の確認を重ねながら取組を進めていくことの効果がより明らかになったと考えられるが、今後は以下の具体的な課題改善策について、チーム清水小として確実かつ臨機応変に取り組みながら、進捗状況の確認を定期的に繰り返し、継続していくことが重要である。

(1) 進捗状況の確認を定期的に行い、校内で課題を共有し取組を進める

- ① 1時間毎の学びの状況の確認（適用問題・算数日記等）。
 - ② 単元毎や1学期毎の学びの状況の確認（市販テスト、単元テスト等）。
 - ③ 既習内容の定着状況の確認（算数シート、単元テスト（フォローアップ、チャレンジ含む）等）
 - ④ 長期的な定着状況の確認（各種学力調査等）
- 児童の学力の状況を定期的に確認し、担任だけでなく学校全体の課題として取組を進めていく。

(2) 思考力・判断力・表現力を伸ばす

校内研修において、各種調査問題等の結果分析から、より具体的に課題の改善策と課題克服の場・機会を示し、全教員で確実かつ臨機応変に取り組んでいく。同時に、授業の中で、お互いの考えや気づきを伝えたり、書いたりする時間を増やすこと、家庭学習や加力指導に活用力育成の問題を取り入れることを継続していく。

(3) 主体的で必然性のある対話活動の構築

本年度までに自校で作成し加筆修正をしてきた年間計画の言語活動に沿った授業を引き続き展開していく。さらに、対話やグループ討議を充実させ、深い学びにつなげていくために、対話の目的や必然性、タイミングなどをさらに研究し、児童が進んで聞きたくなる・伝えたくなるような場面を設定し、児童が主体的・協働的に学び合える授業としていく。

(4) 算数日記によるふり返り活動の充実

授業の中に確実に算数日記を取り入れていくだけでなく、授業のねらいや評価規準の達成に向けて効果的なふり返りができるように算数日記のスタンダードの見直しを行う。また算数日記を予習や次時につなげるなどの活用法についての研究と実践を進めていく。

(5) ノート指導の徹底と充実

【自分の考え（方法・理由の説明）、友達の考え、気づき、自主的なメモ、まとめ、ふり返り（適用問題・算数日記）等】が、しっかりノートに書けるようにするために、授業スタンダードに基づいたモデルとなる算数科ノートの掲示を継続して行い、有効に活用していく。また、ノート指導の実践交流を定期的に行う。

(6) 家庭学習の質の改善

更なる学力の定着と学習意欲の向上に向けて、家庭学習の質と量について見直しを行っていく。その中で、これまでほとんどが復習中心であった家庭学習に、3割以上の頻度で予習を取り入れながら、授業で活躍できる児童を増やしていきたいと考えている。また、放課後学習教室の体制化と充実化を進め、家庭学習が難しい児童を積極的に参加させることで、家庭学習の習慣化を図る。

※その他、研究の取組については別に添付すること。（様式は拠点校で定める。）

※加配教員の活用については別葉とすること。

4. 年間事業経過

月	取組の内容		
	校内における取組（組織づくり・校内研修等）※内容・講師名等記載	公開授業研・研究発表会等 ※内容・参加者数等記載	先進校視察・県連絡協議会等 ※行き先・視察の概要等記載
4 月	・研究授業の進め方と指導案様式の提案 ・清水小授業スタンダード・提案授業 5 年 1 組「体積」		
5 月	・清水小授業スタンダード学習会 ・全国学力・学習状況調査（以下全国学テ）自校採点分析結果報告 ・特別支援学級公開授業（なかよし 1「自立」、なかよし 2「算数」、なかよし 3「国語」） ・成果物の確認 ・家庭学習提出状況調べ		安芸市立安芸第一小学校 講師（齋藤一弥氏：横浜市立六浦南小学校長）の公開授業と同講師による授業の中における子どもたちの思考・表現についての講演
6 月	・講師招聘研：全国学テの結果分析と今後の活用について（講師：西部教育事務所：村上克仁指導主事） ・全国学テの問題学習会 ・標準学力調査（以下標準学テ）の分析についての提案 ・講師招聘研：公開校内研・事前研（講師：西部教育事務所・村上克仁指導主事、同・久保田隆一指導主事） ・第 1 回授業力診断シート実施		第 1 回学力向上研究主任会 （於：黒潮町ふるさと総合センター） 授業改善を意識した組織的・効果的な校内研究の実施に向けて研修会
7 月	・第 1 回公開校内研修 公開授業・研究協議 講演「アクティブラーニングを重視した授業づくりについて」 （講師：文部科学省・笠井健一調査官、西部教育事務所・村上克仁主事、同・久保田隆一指導主事） ・第 1 回公開校内研修のふり返し ・標準学テ分析・考察結果と今後の手立てについての協議 ・単元テスト分析結果報告と問題分析 ・活用力の課題を明らかにする研修会 ・放課後加力指導計画の見直し ・家庭学習提出状況調べ	公開校内研修 ・公開授業と研究協議 「あまりのあるわり算」（3 年 2 組） 「分数のわり算」（6 年 2 組） ・講演 ※校外参加 12 名	

8 月	・教育課程年間指導計画（1 学期分）の検証 ・第 1 回授業力診断シートの結果分析 ・単元構想・適用問題の作成 ・1 学期分の言語活動年間指導計画の加筆・修正 ・授業スタンダード提案授業・事前研		
9 月	・全国学力・学習状況調査分析結果の考察と今後の取組について ・算数日記スタンダードの提案 ・各学力調査で明らかになった誤答が多かった単元一覧作成 ・第 2 回公開校内研修・事前事後研（講師：西部教育事務所・村上克仁指導主事） ・算数科ブロック研① ・家庭学習提出状況調べ	公開校内研修 「3 つのかずのけいさん」 （1 年 1 組） ※校外参加者 3 名 算数科ブロック研① 「分数と小数・整数の関係」 （5 年 2 組）	
10 月	・講師招聘研：中間発表会・事前研（講師：西部教育事務所・村上克仁指導主事、同・宮崎史和指導主事、同・深原純一指導主事、同・久保田隆一指導主事） ・オンデマンド研修 ・全国学テ・標準学テの再テスト ・「聴く・話す・書く」の中間検証 ・活用力育成の中間検証 ・家庭学習提出状況調べ		第 2 回学力向上研究主任会 （於：黒潮町ふるさと総合センター） 授業改善を意識した組織的・効果的な校内研修の取組の成果と課題と今後の計画を明らかにするための研修会
11 月	・授業スタンダードの提案授業 ・中間発表会 公開授業・研究協議 講演「効果的な対話と振り返りを取り入れた授業づくり～先進校の事例をもとにして～」 （講師：文部科学省・笠井健一調査官、西部教育事務所・村上克仁指導主事、同・宮崎史和指導主事、同・深原純一指導主事、同・久保田隆一指導主事） ・再テストの結果を分析・検証 ・家庭学習提出状況調べ ・算数科ブロック研②	提案授業 ・公開授業と研究協議 「比べ方を考えよう(2)」 （5 年 2 組） 中間発表会 ・公開授業と研究協議 「長方形と正方形」(2 年 1 組) 「変わり方調べ」(4 年 2 組) 「図形の角」(5 年 1 組) ・講演 ※校外参加者 45 名 算数科ブロック研② 「変わり方調べ」(4 年 2 組)	

12 月	・教育課程年間指導計画（2 学期分）の検証 ・中間発表会の成果と課題の共有 ・単元テスト分析結果報告と問題分析 ・第 2 回授業力チェックシートの分析 ・算数科ブロック研③ ・家庭学習提出状況調べ	ブロック研④ 「かたちあそび」（1 年 2 組） 算数科ブロック研③ 「かけ算（2）」（2 年 2 組）	
1 月	・道徳授業研究（第 3 回公開校内研）事前・事後研（講師：松岡舞指導主事） ・先進校視察 ・高知県学力定着状況調査の分析と今後の取組について協議 ・家庭学習提出状況調べ	公開校内研修 「世界に一つだけの花」（6 年 1 組） ※校外参加者 0 名	香川大学附属坂出小学校 対話を通した「思考力」の育成の研究発表会 教育課程拠点校事業連絡協議会（於：高知会館） 実践交流を通して、成果と課題を共有し、取組の一層の充実を図るための協議会
2 月	・教育課程年間指導計画（1 年間）の検証 ・先進校視察報告 ・一年間の校内研総括 ・成果物の確認（単元構想、適用問題など） ・家庭学習提出状況調べ		
3 月	・次年度の取組に向けて（重点課題等） ・家庭学習提出状況調べと取組の総括		

※公開校内研修は校外に案内する会

加配教員の活用（別葉とすること）

学校名 土佐清水市立清水小学校

校長名 筒井 広実 印

具体的な
取組状況

- (1) 研究の中心的役割を担い、各学年で1単元分の単元構想（全時間の指導案を含む）の作成や、算数科における教科経営計画をよりよく活用していくための加筆修正を推進した。
- (2) 研究テーマに沿った授業づくりに重点を置き、系統立った指導を行っていくため、年度当初に研究主任が授業を公開し、全教員に「清水小授業スタンダード」の徹底を行った。その際、下記についての確認も併せて行った。
- (3) 校内研修において、全教員で全国学力・学習状況調査、単元テスト、高知県学力定着状況調査の分析結果を共有するための中心的役割を担い、また、洗い出した課題とその改善策について迅速に協議するために、各種調査終了後1週間以内には資料をまとめ提示するようにしてきた。特に3学期に行う高知県学力定着状況調査は、その後対応できる期間が短いため、調査の翌日に自校採点結果と考察を提示した。また、それぞれの調査で誤答が多かった問題をまとめ、全教員で解く機会を設定し、本校の課題や今求められている学力観について共通理解を図った。10月には、全国学力・学習状況調査と標準学力調査で特に誤答が多かった問題（平均正答率60%未満）について、2～6年が行う再テストを作成し、結果を分析した。
- (4) 習熟度別少人数指導、TT指導に主として関わった。児童の基礎学力の定着と学力の向上を図るため、習熟度別少人数指導では、それぞれのコースで導入時における問題の提示や問題場面のイメージをもたせる支援、有効かつ適切な対話活動の工夫、児童の実態に応じた適用問題等を作成することや視覚に訴える教具などを作成した。また、各学年の研究授業に積極的に参加し、授業改善につなげられるよう助言しながら、若手教員の育成や組織全体の意思統一や意識改革を図ってきた。
- (5) 日常的に算数科における授業改善を進め、児童が「主体的・協働的に学習に取り組める」ための教具の工夫や教材・資料の作成を中心となって行ってきた。また、校内・教室の算数的環境づくりを進めるために、毎月、全学年の児童が興味を持って取り組めるようペーパーチャレランの問題準備や集計、結果報告を行ったり、書き方のモデルとなる算数ノートを掲示したりした。また遠足等の行事でも児童の量感を養うことをねらったゲーム活動を取り入れた。
- (6) 先進的な取組や、効果的な取組が校内研修の場において進められるように視察や研修会に参加し、参加した教員全員が伝達講習を行うようにしたり、新た

な提案に生かしたりして、組織的OJTの活性化と指導力向上を図ってきた。
今年度は、安芸第一小学校と香川大学附属坂出小学校を視察した。

- (7) 教育課程拠点校として、7月に2学級3コースの公開校内研修会と11月に3学級4コースの中間発表会を行った。また、中間発表会では、市内外70名の教員や関係者の参加のもと、提案授業・協議・講演等を実施し、それまでの取組の成果と課題について広く意見を集めることができた。また、土佐清水市教育研究集会の算数部会で、本校の授業スタンダードをもとにした提案授業と研究協議等（8月に事前研修、11月に事後研修）を行った。その際、学校の取組や成果についての情報発信も併せて行った。3月には黒潮町の佐賀小学校の校内研に参加し、本校の取組や授業スタンダード等について紹介する予定である。
- (8) 思考力・判断力・表現力＝活用力の育成を目指し、各種調査の分析を基に活用力を要する問題のどこにつまずいているかについて、考察したことを校内研修で全教員で協議し、学年ごとに「日々の授業」、「家庭学習」、「その他の場面」で取り組んでいく内容を明らかにした。また、学期末と10月に進捗状況と成果・課題について、学年団や教職員全体で協議したことを、一覧表にまとめた。
- (9) 家庭学習の習慣化と質の向上に向けて、「家庭学習提出状況調べ」を毎月行い、各学級の実態を共有できるように、集計結果と変遷を提示すると同時に、家庭学習が難しい児童の放課後学習教室への参加を促してきた。また、「家庭学習の手引き」「自主学習の手引き」に基づいた家庭学習を推奨しながら、家庭学習における予習：復習の比重が3：7になることを目指して、提案や声掛けを行ってきた。5月と11月には、各学級の家庭学習の内容と量を確認し、夏休み明けには宿題の量や質、提出状況を調べ、系統的な家庭学習の確立を図ってきた。
- (10) 基礎学力の定着と活用力の育成を目的として、担任だけの加力指導に加え、管理職、少人数指導担当、児童支援担当、学習支援員等複数の教員が加わっての加力指導を提案し実施した。また、11月と12月は4年生と5年生、1月～3月は5年生に限定しての加力強化月間とし、週2日（火・木）放課後に、算数・国語シート、活用問題のプリントや過去の調査問題等を用いての加力指導を行った。この期間は、管理職・少人数指導担当は4年生、5年生に集中して関わるようにした。

次年度からも講師を招聘し、授業研究を中心に校内研究を充実させ、児童が主体的かつ協働的に学び合う授業づくりを目指していく。そのためにも、本年度の課題を精査したうえで、取組や方向性を明確にして研究を推進していく。

達成目標の到達度	◎「研究主任として、授業参観を行い、取組状況を把握し、PDCAサイクルによる研究推進役としての役割を果たし、授業スタイルを確立する。」 ◆達成度 各学年で、単元構想（単元の全時間の指導案を含む）の作成と、言語活動を記載した年間指導計画の加筆修正をするなど、研究テーマに沿った授業づくりに重点を置き、組織的な取組を進めた。また、校内研修で各学級の実践状況についての報告機会を設定し進捗管理を行う等、PDCAサイクルのもと研究推進役としての役割を果たし、清水小授業スタイルの徹底を図った。 (1) 達成目標Ⅰ 「対話と振り返りを重視した算数科の授業づくりを通して、主体的かつ協働的に学ぶ児童を育て、3学期に行われる高知県学力定着状況調査や次年度の全国学力・学習状況調査等において県・全国平均＋3ポイント以上とする。また、標準学力調査算数科において、評定1の児童20%未満とする。」 ◆ 目標Ⅰの達成度 ・高知県学力定着状況調査の結果…目標を達成 4年生：算数 65.6%（県平均 60.9%）→ +4.7 5年生：算数 73.9%（県平均 54.5%）→ +19.4 ・標準学力調査の結果（算数）・・・目標を達成できなかった 2年生：26.2% 3年生：30.6% 4年生：12.1% 5年生：15.9% 2～5年生の平均：21.2% (2) 達成目標Ⅱ 「授業公開を積極的に行い、校外への提案授業や実践報告（3回程度）をする。」 ◆ 目標Ⅱの達成度 研究発表会や公開校内研修等で、対話と振り返りを重視した授業公開を行い、積極的に校外への提案授業を行うことができた。また、市教研（算数・数学部会）でも積極的に研究授業を行ったり、本校の取組について情報発信したりすることができた。3月には市外小学校の校内研修でも本校の取組について紹介する予定である。 (3) 達成目標Ⅲ 「対話につながる聴き方・話し方の手引きや学び合いカードの工夫・改善（年2回以上）や、根拠をもとに自分の考えがかけられているかどうかの検証を定期的に行い、清水小の対話スタイルを確立する。」 ◆目標Ⅲの達成度 年2回以上の工夫・改善はできなかったが、5月に各学年の児童の実態と各担任の想いを基に、今年度新しく「聴き方・話し方・書き方」の手引きを作成し、毎学期末と10月に、聴く・話す・書くの成果と課題、今後の具体的課題を一覧表にまとめることができた。また、モデルとなるノートの提示を毎月更新したり、自分の考えや気づきがしっかり書けている算数日記を提示したりしてきた。対話スタイルの確立については、学期末に対話の成果と課題を各学級から出し合い、共有してきた。
----------	--

(4) 達成目標Ⅳ

「適用問題・ふり返りの工夫・改善を行い、成果物としてまとめる。」

◆ 目標Ⅳの達成度

全学年の適用問題はその時間の展開と合わせて、1 単元新たに成果物としてまとめることができた。ふり返しについては「算数日記スタンダード」を作成し、これに基づいた児童の記述や教師の評価ができるようになってきたことが、学期末の取組の成果と課題からもうかがうことができる。また、各学年で同じ児童の4月と10月の算数日記を比較し、その成果と課題を出し合う機会も設けることができた。

(5) 達成目標Ⅴ

「授業力診断シートにおいて、児童から3.5P以上、教師自己3.3P以上の肯定的評価を得ることができる。また、学校評価アンケートにおける「授業がよくわかる」の肯定的評価を90%以上にする。」

◆ 目標Ⅴの達成度

・ 授業力診断シート

児童用…目標を達成

6月の平均結果：3.6 11月の平均結果：3.7

教師…目標を達成

6月の平均結果：2.8 11月の平均結果：3.2

・ 学校評価アンケート…目標を一部達成できなかった

「授業（全教科）がよく分かりますか」：肯定的評価90%

「授業（算数科）が楽しいですか」：肯定的評価89%

(6) 達成目標Ⅵ

「算数に関わる環境づくりと学習習慣の形成の達成目標は、授業アンケートや3学期に行われる高知県学力定着状況調査や次年度の全国学力・学習状況調査等の質問紙で、算数の学習に肯定的な回答を90%以上とする。」

◆ 目標Ⅵの達成度

・ 授業アンケート…目標を一部達成できなかった

※達成目標Ⅴ参照

・ 高知県学力状況調査・・・目標を達成

※達成目標Ⅰ参照

・ 家庭学習提出状況調べ・・・目標を達成

毎日全部提出できる児童・・・2月末で約85%（目標：80%）

(7) 達成目標Ⅶ

「HPの更新を定期的に（学期に1回以上）行えるよう担当と連携し、取組や成果物を発信し普及を図る。」

◆ 目標Ⅶの達成度

学期に1回以上更新するという目標は、1・2学期はできたが、3学期は校舍改築にともなうPCやデータの移動等も重なって達成することはできなかった。

今後の課題	(1) 高知県学力定着状況調査結果で明らかになった課題の改善 高知県学力定着状況調査では目標以上の成果が挙げられたが、記述式問題等で依然課題も残っている。児童の学力の更なる底上げを目指し、日々の授業の充実に加え、習熟度別の加力学習にも取り組み、基礎基本の力と活用力のバランスの取れた育成と向上に努め、4月の全国学力・学習状況調査においては県平均＋3P以上を目標とする。 (2) 次期学習指導要領に向けての授業づくり 主体的・協働的に学ぶなかで、より確かな知識を身に付け、何ができるようになるかを意識した授業づくりの研究を推進していく。そのためには、深い学びにつながる対話やふり返りの実現に向けての研究が今後の大きな課題である。そして、児童の主体性・協働性を重視した清水小授業スタンダードをより質の高いものにしていく。 (3) 校内研究の内容の充実 さらに児童の学びの質を高めていくために、来年度改めて、モデルとなるノートの内容や書き方について検討を行い、算数科ノートのスタンダードを確立していく。それに伴い、教師の板書の在り方や授業展開等についても改善を図っていく。算数科の授業後にはその時間の板書をデジカメで撮影し、データを保管していき、研究授業等でも活用するようにしたい。 (4) 学力の定着と学習意欲の向上に向けて 放課後学習教室の体制化・充実化と家庭学習における予習：復習＝3：7を目指す取組が大きな課題である。特に今年度の目標の一つであった予習：復習の比重＝3：7がほとんど達成できなかったので、来年度は早期に「予習の手引き」を作成したり、翌日の授業とリンクした家庭学習になるように内容を見直したりすることで改善を図っていきたい。また、家庭学習を毎日全部提出できる児童の割合が90%以上になることも目標に加える。 (5) 若手教員の育成に向けた校内体制の整備 学校全体の時間割表を作成する段階で、加配教員の受け持つ時間と若年教員の算数の時間が重ならないようにし、研究授業だけでなく普段の授業にも積極的に入り指導助言できるようにする。また、若年教員に限らず、日々の授業やノート、家庭学習等を見合えるような体制・機会も積極的に導入していく。 (6) 研究内容の普及と協力校への支援 近隣の小規模小学校の校内研修に参加し、提案授業や学校の取組・成果について情報発信していく。また、教材研究等にも積極的に関わり支援を行い、連携を深めていく。今年度は近隣小学校の校内研修参加が3月になってしまったので、2学期末までには行えるようにする。HPにおいても、学期に1回以上の更新を目標に、参考となる情報を発信していく。
--------------	--

※ 実績報告に関する資料を添付すること。